



TITLE:

「内的な他者」からみた「葛藤のない」クライアント(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

野口, 寿一

CITATION:

野口, 寿一. 「内的な他者」からみた「葛藤のない」クライアント. 京都大学, 2013, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2013-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k17804>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

| | | | |
|---|--------------------------|----|-------|
| 京都大学 | 博士（ 教育学 ） | 氏名 | 野口 寿一 |
| 論文題目 | 「内的な他者」からみた「葛藤のない」クライアント | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>近年、自分の問題について葛藤する姿勢に乏しいクライアントが増加しており、従来の心理療法が通用しがたいことが指摘されている。本論文は、そのような者を「葛藤のない」クライアントと呼び、それへの心理療法のあり方を検討したものである。</p> <p>第1章では「葛藤のない」あり方を検討するために、他者についての語りが注目された。従来の心理療法では、他者について語ることで、クライアントはそれに重ねられた自分の特徴に関わっている。つまり、そこで語られる他者は「内的な他者」であって、それを通じて自分の内的な葛藤を扱っている。それに対して葛藤のないクライアントでは、他者について語っても本人の問題を見つめることにつながっていない。それについて、自分自身と他者との関係性に特徴があるとみなして、「内的な他者」という観点から「葛藤のない」あり方について検討が行なわれた。</p> <p>内的な他者との関係性を調べるための方法として、TATを用い従来の教示で物語を作らせた後に、その主人公以外の人物の視点から2つめの物語を作らせる変法（第2物語法）が用いられた。この課題は、語り手が主人公に同一化して表現を行った後に、その主人公以外の人物に同一化して表現させる。そうして語られた第2物語には、他者の表象に重ねられて現れる内的な視点、すなわち内的な他者の様相が現れるのではないかと考えられた。また、図版の人物について語り、それに対する他者の視点を語ることは、心理療法においてクライアントが自分自身について語り、内的な他者について語るという構図と同様であるため、心理療法場面におけるクライアントのあり方を考えるための課題として適していると思われた。</p> <p>第2章から第5章では、TAT第2物語法を用いた調査から「葛藤のない」あり方について検討がなされた。調査対象は大学生を中心とする94名であり、図版1、2、3BM、13MFを用いて、個別に実施された。第2章では第2物語課題における心的作業の性質が検討された。課題に失敗した者や課題の困難さを訴えた者の感想を中心にした分析から、第2物語課題では、自分自身の視点を棚上げして、他者の視点に立つ心的作業が要求されると考えられた。従って、第2主人公の視点に表現された内容には、他者の表象に重ねられて現れる内的な視点、つまり内的な他者が投映されると考えられた。</p> <p>第3章では、内的な他者に対する本人の意識的な捉え方に注目された。調査協力者の第2主人公に対する感想を分類し、葛藤のなさの尺度として取り上げた解離体験尺度DESとの関連が検討された。解離的な傾向の高い者は、内的な他者を、外的な他者の表象と結びつける一方で、自分自身との結びつけて捉えにくいという特徴があることがわかった。</p> | | | |

(続紙 2)

第4章では、内的な他者の「私」に対する関係性に注目した検討が行われた。図版3BMの反応から、第2主人公の視点の第1主人公に対する関係性と、不安尺度CASおよび解離体験尺度DESとの関連が分析された。解離的な傾向に関連するような葛藤のなさは、内的な他者の「視点の内容」ではなく、内的な他者が「私」にとっての「相手」の位置にあるか、という「視点の位置」と関連することが示唆された。

第5章では、「葛藤のない」者の悩み方とその深まりにくさの背景にある特徴について検討された。(ア)「私」に対する相手の位置にある内的な他者について語るか(イ)「私」に対する非当事者の位置にある内的な他者を語るか(ウ)独立した視点をもったものとして他者を描けないかによる葛藤の様相の違いが、それぞれの特徴的な調査事例によって検討された。(ア)では、対峙してくる相手の視点を自ら想像して緊張関係を作り出しているような悩みが現れていた。内的な他者について想像を深めて語ることが、葛藤に動きをもたらし、主観性によって悩みを生み出している自分自身の変化につながりうると考えられた。それに対して、(イ)では、悩みに、相手との関係が関連づけられていない。また、非当事者の位置にある内的な他者について語ることは、「悩んでいる自分」を外から見て表面的に関わるこころの動きにつながるが、元の悩みそのものに動きをもたさなため、自分自身の変化につながらないと考えられた。そして、(ウ)では、自分と世界との境界がないため、ぼんやりとした不安全感や自己愛に包まれたままになっていて、他者について語っても新たな心の動きが生まれにくいと考えられた。

第6章から第8章では、これまでの章で明らかになったことを踏まえて、中立的に聴くという従来のセラピストのスタンスでは心理療法が展開しにくかった3つの心理療法事例が検討され、終章ではそれらの総合的考察から、「葛藤のない」クライアントの心理療法におけるセラピストの姿勢について論じられた。それぞれの事例を内的な他者という観点からみると、「私」と内的な他者と相手として対峙する関係が維持されない(第6章)、「私」がないゆえに内的な他者との関係が生まれない(第7章)、独立した他者の視点を想像できない(第8章)という特徴があり、いずれも内的な他者との関係性の構造の不安定さという特徴があると考えられた。そのような特徴をもつ者にとっては、相手の視点と対峙する「接点」の体験が、クライアントが自身の内面を感じ取り、世界と主体的に関わるための内側の「芯」が生まれる機会となると考えられた。したがってセラピストには、内的な他者と対峙することを「強いる」と同時に「保護する」枠組みを提供した上で、表現されたイメージの流れに沿っていき、内的な他者と対峙する瞬間を共にするようなコミットメントが求められると考えられた。

注)論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

近年、心理療法において発達障害と見立てられるクライアントが増加しているだけでなく、自分の問題に取り組んだり、それについて悩んだりすることのないクライアントが心理療法において増えているという報告が多く見られ、「サイコロジカルマインド」の欠如などということが言われている。本論文はこのようなクライアントを「葛藤のない」クライアントと名づけ、その特徴をまず投影法のTATを用いた調査によって探り、さらにその心理療法の可能性を追求した研究である。

第1章では、「葛藤のない」クライアントの特徴を検討するための本論文における視点として、「内的な他者」という概念がまず抽出された。通常心理療法において、親や同僚などの他者との葛藤が語られる場合が多い。その場合のトラブルは現実のものというよりも自分自身の中における葛藤を表現していることが多いので、それは現実の他者でなくて、「内的な他者」と本論文では名づけられた。ところが「葛藤のない」クライアントにおいては、他者について語ったり、批判したりしていても、それが自分自身の問題につながっていかない。サイコロジカルマインドの欠如した「葛藤のない」クライアントを研究するために、「内的な他者」という視点をクローズアップすることから検討していったところに本論文のユニークさがあると考えられる。

その「内的な他者」との関係性を調べるために、絵から物語を作るTAT検査において、通常物語作成の後に、その主人公以外の人物から見た物語を作らせる「第2物語法」という独自の方法を作り出したところに、本論文の独創性がある。この方法を用いたために、前半における調査研究、後半における事例研究の両方が可能になり、また心理療法においても第2物語法を用いることによって双方を有機的につなぐことができたと思われる。

第2章から第5章は、TAT第2物語法を用い、健常者を対象とした調査研究から、「葛藤のない」あり方について検討したものである。第2章では、第2物語の作成に失敗したり、それが困難であったりした調査協力者の感想の分析から、第2物語では第1物語の主人公との関係の中での他者を想像する視点が必要なのがあり、「内的な他者」という概念の妥当性が示唆されていて興味深い。

第3章では、第2物語の主人公についての感想の分類と、解離体験尺度の関連から、解離的な傾向が高い者は、第2物語の主人公を外的な他者に結びつけ、自分自身とあまり結びつけていないことがわかった。つまり「葛藤のない」者においては、「内的な他者」というのが機能していないと考えられ、「葛藤のない」者への心理療法の困難さを示している結果である。

第4章は、第2物語の主人公から、第1物語の主人公に対する関係性を分析したものである。第1物語の主人公の悩みや困難に対して、当事者の立場に立つものより、非当事者の立場に立つ者の方が高い解離傾向を示すという結果は、「葛藤のなさ」が視点の内容ではなくて位置に関係していることを示唆している。葛藤は、自分と自身の関係と考えられるが、その際の内容ではなくて、視点の位置という形式や構造面が重要なことが浮かび上がったのは注目に値する。

第5章は、これまでの調査をまとめる形で、「葛藤のない」者の深まりにくさの背景にあると考えられる特徴について、第2物語で（ア）内的な他者について語る、（イ）非当事者について語る、（ウ）独立した他者が描けない、という3つの場合に分けて考察している。（イ）や（ウ）の数はやや少ないものの、内的な他者が存

(続紙 4)

在しにくい場合についての、プロトタイプを示すことに成功していると考えられた。

2章から5章の調査による基礎的な研究を踏まえて、6章から8章では3つの自験例について、「葛藤のない」クライアントについての心理療法の可能性が検討されている。ある臨床心理学的テーマについて、調査研究を行い、その後に事例を付け加えるスタイルはこの分野の博士論文においてしばしば見受けられる。しかし本論文の非常に評価できるところは、前半の調査研究と後半の事例研究が有機的に結びついているところである。つまり調査研究で用いられたTATの第2物語法が実際の心理療法において用いられ、それが査定の意味のみならず、心理療法の展開を促進する働きを持っていることを後半の6章から8章が示すことに成功している。それは第2物語法が、単に調査のための特殊な方法に終わってはず、臨床的な価値を持っていることを示している。

3つの事例における葛藤の持ちにくさは様々であるけれども、それぞれにおいてTATの第2物語法を実施することによって、心理療法に展開が生じてきているのは注目に値する。第6章の事例においては、内的な他者との対峙を避けていたようなクライアントがTAT第2物語法によって、相手と接触し、自分を出すようになっていった。第7章の事例では、「私」がないゆえに内的な関係が生じてこなかったのが、TATを通じて、自分を映し出す器を持てるようになっていった。第8章の事例では、第2物語の視点から語ることができなかったのが、自他の分離や内と外の分離ができるようになった。

このように本論文は、調査研究と事例研究とを1つの方法でつないだものとして、非常に高く評価できる。第5章などにおける様々なタイプの分類が論理的なものに過ぎないのでは、「葛藤のない」という表現はやや厳密さに欠けるのではという批判もあったが、これらの問題点の指摘は、斬新で興味深い成果を生み出した本研究の分析のさらなる展開と深化を視野に入れたものであり、本研究の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成25年 5月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降